

「鍋島 直彬公 展 ～夫婦で守り育んだ鹿島の文化遺産～」

ギャラリートーク（展示解説）

平成26年10月5日

鹿島市民図書館 学芸員 高橋研一

（1）展示にあたって



今回、「鍋島直彬公展」を行うにあたって、「夫婦で守り育んだ鹿島の文化遺産」というテーマを決めていった背景、またこれまで3回にわたって直彬さんの展示を担当して感じたことからお話しします。

迎先生のお話にもあったように、直彬さんは鹿島の近代化のため様々な取り組みをされています。その全体を展示の中で表現するのは非常に難しいということもあり、今回は、直彬さんの鹿島での功績の中でどのような面にスポットを当てていくのかということを考えてみました。その際に、東京から鹿島に戻ってきた直彬さんがどのような状況や課題に向き合っ、どう対応していったのかという点に今回のテーマの焦点を当てています。その際、直彬さんが自らの思いを書き綴った膨大な自筆の史料（書簡や覚書など）を丹念に読み解いていくことによって、直彬さんの思いや抱えていた苦悩に寄り添いながら直彬さんの事蹟を考えるということを心がけました。

その直彬さんの膨大な自筆史料を見ていくと、直彬さんは、この鹿島鍋島家という“家”がいかに存続していくか、どうあるべきかということを最優先に考えていた姿がヒシヒシと感じられました。そこで今回の展示の中では、直彬さんは鹿島鍋島家が鹿島の中でいかなる存在であるべきか、そして当主やその夫人がいかにあるべきかということ、どう考え実践していったのかを、展示の根幹に据えています。

これまで^{あいち}藺子さんについては、ほとんど語られることはなかったと思います。どうしてそのようなことになるのかということ、鹿島鍋島家全体に通じる問題なのですが、研究の基礎となる「年譜」は藩主の事蹟のみを記すというのが基本的なスタンスなので、藩主夫人の事蹟はほとんど載せられることがありません。そのため、年譜に視点を置いて歴史像を描いていくときは、藩主、あるいは男性中心の歴史像が描かれ、記載のない藩主夫人、あるいは女性たちが排除された構図に陥りがちでした。特に、直彬さんの時代の功績はすべて直彬さんのものとする先入観があまりに強く、藺子さんの役割や存在がこれまで全く顧みられることがなかったというのが現状だと感じています。

そこで、今回の展示を通して、直彬さんを支えた藺子さん、藺子さん以外にも鹿島の中で活躍した様々な女性たちに、皆様にも関心を向けていただければと思っています。

これまで3年にわたって直彬さんの展示を担当して、直彬さんについては、わからないことや調べなければならぬことが、まだまだたくさんあるというのが正直なところです。

これまで直彬さんの時代を見るときに、直彬さんや直彬さんを支えた原忠順さんの登場に時代の画期や転換点を求めるあまり、直彬さんの前の時代との断絶面ばかりが過度に重視され、連続面や継続してきた面が軽視されてきた傾向があったと思います。そのため、直彬さん自身が代々鹿島鍋島家の培って

きた政治・文化風土の中で成長したことさえ顧みられてきませんでした。そして、病弱であったり幼少であったりという藩主が相次ぎ、藩政が乱れていた鹿島を、直彬さんが忠順さんの協力によって立て直したという歴史観が定着したのです。それは一面の事実ですが、見方を変えると違う鹿島の歴史が見えてきます。

一例を挙げると、鹿島錦の創始者として知られる9代藩主^{なおのり}直彝^{あつ}夫人の篤さんは、文政9年(1826)に直彝さんが亡くなった後、明治10年(1877)に79歳で亡くなるのですが、その間、4代の藩主を支えました。篤さんは病弱や幼少の藩主が相次ぐ中、前藩主夫人として政務を後見していたと考えられます。祐徳博物館には篤さんの鎧が飾られていますが、これは他の藩主夫人には見られないことです。女性なのに、なぜ鎧が必要だったかということ、藩の政治を取り仕切る上で、その場を飾る道具として鎧が必要だったということだと思います。また、篤さんは、農民を労うため、稲の花を観る宴を毎年8月に開いています。直彬さんはこの宴に影響され、桜を植えて衆樂園を造りました。直彬さんの発想は篤さんの発想と全く同じものです。



篤の鎧 (祐徳博物館蔵)

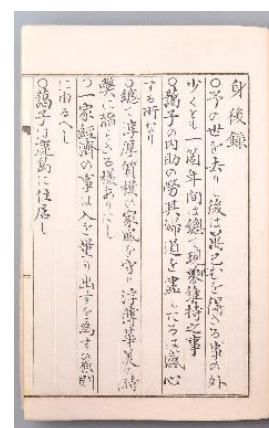
こうした点は、まだ推測の域なので、今後詳細に研究していく必要があるのですが、6歳で藩主となった直彬さんに政治・文化を教え、また19歳で嫁いできた藺子さんに藩主夫人としての振る舞いを躰けたのは篤さんだったと考えられます。江戸の著名な学者から教わる学問ではなく、実践としての政治・文化のあり方を直彬・藺子夫妻に伝えた篤さんの存在は今後解明すべき重要な課題です。

また、3年にわたる展示に当たって、鹿島市内の多くの方々のご好意・ご協力によって、史料の掘り起こしが進み、無事に展示を構成することができました。改めてお礼を申し上げます。今後はこうした貴重な史料を鹿島の宝として世代を超えて伝え抜いていく私たちの知恵と努力が試されるのではないのでしょうか。

(2) 展示史料解説

① 身後録

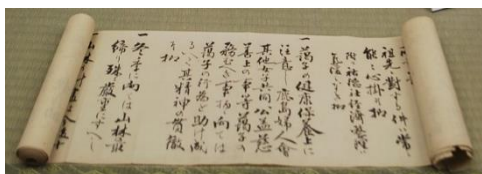
身後録というのは、直彬さんの遺言書です。大正2年小浜温泉に逗留していた時に書かれたものです。直彬さんは晩年非常に病弱になっていたため、毎年のように遺言書を書いています。この身後録の中では、第2ヶ条で、藺子さんの内助の功を労う文章を書いています。これも、次の覚書も、直彬さんの自筆の文字になります。



身後録 (鹿島市民図書館蔵)

② 覚書

直彬さんは、貴族院議員となったので、議会が始まる12月頃上京して、議会が終わる3月頃鹿島に帰ってくるというライフスタイルを送っています。その際、藺子さんを連れて行くときもあれば、鹿島においていくパターンもありました。その中で、これは藺子さんを鹿島に残していくときに、鹿島鍋島家の屋敷を守っている人たちに、藺子さんに対する注意事項を記したものです。



覚書（鹿島市民図書館蔵）

「藹子の健康保養上に注意し」とは、藹子さんが体調不良だったから、東京に連れて行かなかったということになるのですが、藹子さんの体調に気を付けるよう、まず注意しています。そして、「鹿島婦人会その他女子共同公益慈善上の事等」と書いており、藹子さんの仕事というのは鹿島婦人会に代表されるような女性の事業、それから公益の慈善事業というのが、藹子さんのやるべき仕事として直彬さんも認識していたという姿が見えてきます。

別の資料では、家のトップの「家長」に対し、藹子さんのことを「副家長」と位置付けています。普通の場合は女性は、家長の隣にいて、実権を持たないことが多いのですが、そうではなくて、家の組織の中で、家長に次ぐ存在、そして、直彬さんが鹿島を不在する場合には、直彬さんの権力を代行して鹿島鍋島家を取り仕切る、そうした地位を与えられています。これはなかなか他の藩では見られないことです。

③ 鹿島高等女学校沿革誌

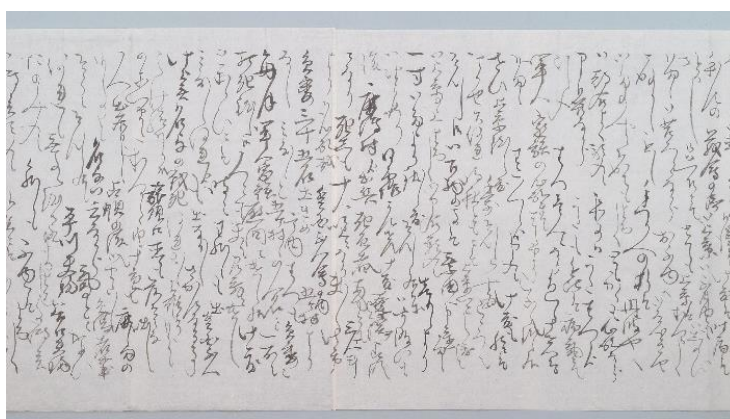
この中には、藹子さんの記述がいくつか見られます。例えば、藹子さんが亡くなった時に葬儀に参列したとか、そうしたことが書かれています。ただし、直彬さんが亡くなったとか、そうした記述は一切出てきません。これは、鹿島高等女学校の歴史を編纂していくうえでは、語るべき人物というのは、直彬さんではなく藹子さんだと、女学校側も認識していたということがよくわかります。

④ 鹿島済貧会寄附名簿

済貧会というのは、地域の、貧しいなどの理由で医療を受けられなかった医療弱者を救済するために作られた医療組織です。そうした組織を作る際に、藹子さんはその創設や運営に大きく関わっていました。こうした慈善事業、赤十字みたいなものですね、そうした事業というのは、藹子さんがやっていた非常に重要な事業です。

⑤ 鍋島藹子書翰

こちらは、藹子さんの自筆の書状です。非常に細かい文字で、横に流れるように書かれていますので、後から読む者にとっては、読むのに非常に苦労する文章なのですが、これは日露戦争のときに書かれた書状です。この書翰には、日露戦争の頃の鹿島の様子が詳細に書かれています。おそらく、日露戦争の時の鹿島の様子を知る上では、超一級品の史料になってくると思います。



鍋島藹子書翰（個人蔵）

当時、まだ旅順が陥落していない頃の話が内容から見えてきます。鹿島の中からもすでに 30 名くらいの戦死傷者が出ていて、旅順が簡単に落ちると云ってはいるけれども、旅順が落ちるまでには多くの鹿島の人々が亡くなっていくのだらうと憂えています。世相的なこともあって、お国のためにという時代なのですが、藹子さん自身は、名誉とは言いながら、人

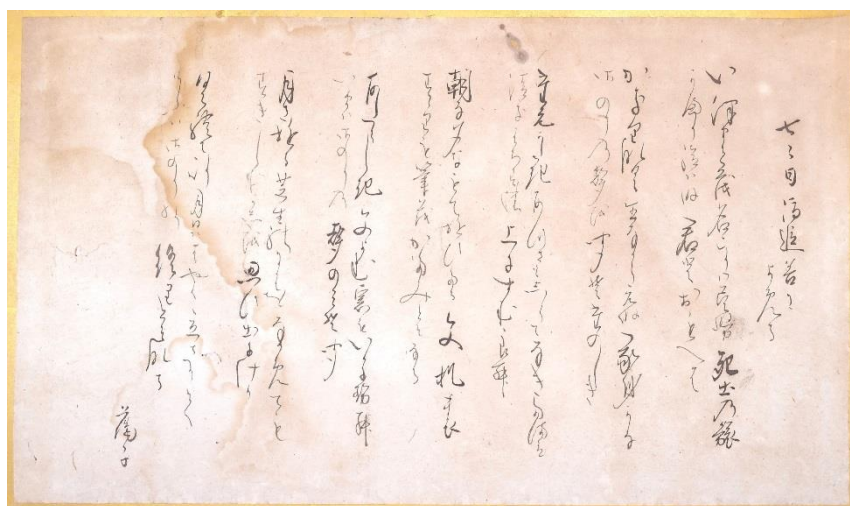
が死ぬということ、また戦死によって残された家族が路頭に迷うということは気の毒だということで、ものすごく気を使っておられます。

藹子さんはあまり体が強くはなかったので、当時、愛国婦人会(婦人会の前身)の人たちが、鹿島の出征軍人の家族を慰問するときには、自らのお付の女中さんを付けて、一緒に回らせています。

それから、鹿島から出征した兵士の場合、日露戦争の頃はまだその死者の数が少なかったということもあり、普明寺で鍋島家主催の合同葬儀が行われています。その合同葬儀の時には、藹子さんも出席したということが書かれています。

⑥ 鍋島藹子和歌

今回の展示でメインに飾っているのが、鹿島鍋島家の菩提寺である普明寺さんからお借りした扁額です。直彬さんは大正4年の6月に亡くなられています。それから七日ごとに法要が行われて四十九日を迎えるわけですが、その1回の法要ごとに1首ずつ詠まれて、最後四十九日に7首目を詠まれて、その後清書されてお寺に納められたものです。これは、藹子さん



鍋島藹子和歌 (普明寺蔵)

の直彬さんに対する思い、夫に先立たれた妻の思いというものがよく詰まっている史料だと思います。

1首ずつ読んでみます。

1首目 「いつまでも名こり八尽ぬ死出の旅 かへり給八ぬ君とおもへは」

直彬さんとの永遠の別れが訪れた場面が描かれています。

2首目 「かきりなく生なからえぬ我身かな みのりの聲を聞そたのしき」

みのり(御法)とは、読経のことです。

3首目 「たえかたきあつさもしらてなきたまは 清きはちすの上にすむらむ」

清きはちす(蓮)というのは、お寺に行けばよく池に蓮の花が植えてあると思うのですが、極楽浄土のことを指しています。亡きたまというのは、亡くなった方の魂のことです。6月から7月にかけて現世では梅雨の暑く、じめじめとした中で法要が行われているけれども、あなたは清らかな極楽浄土からその模様を眺めているのでしょうか、というような和歌になります。

7首目 「くれて行月日ハはやく立さりて けふ八みのりの終りとそなる」

みのりの終わりということで、四十九日の法要を迎えたことがわかります。

このように、直彬さんの死に直面しながらも、静かに見送っていく情景というのが、7首の中で非常によく表現されているのではないかと思います。

今回、この展示のための調査の中で、藹子さんの和歌や書翰を30点ほど確認することができました。今後はこうした史料を丹念に読み解いていくことで、藹子さんの役割や考えといったものにより近づいていくことができるのではないかと考えています。

⑦ 鹿島鍋島家の金銭台帳

鍋島家の場合、金銭台帳が非常によく残っています。これまで直彬さんが鹿島のためにいろんなことをしたと言われてきたのですが、具体的に何をどうしたのかというと、直彬さん自身が労働力を提供するわけにはいかないの、一番やっぱり大きいのは、資金を提供するということです。この金銭台帳を丹念に読み解いていくことで、直彬さんが鹿島の中で、どのようなところに、どのようなお金を配って、どのように育成しようとしたのかを見ていくことができます。鹿島鍋島家は決して裕福な家ではないです。でも自分の家にはなるべく財産を貯めずに、余った財産、余財は公共のために使いなさいということを言っています。質素儉約を旨として、自分たちが着飾るためにお金を使うのではなく、鹿島の公共のために鹿島鍋島家のお金を使いなさいと言っています。この金銭台帳というのは、まさにそれを直彬さんが実践したということが見えてくるものです。

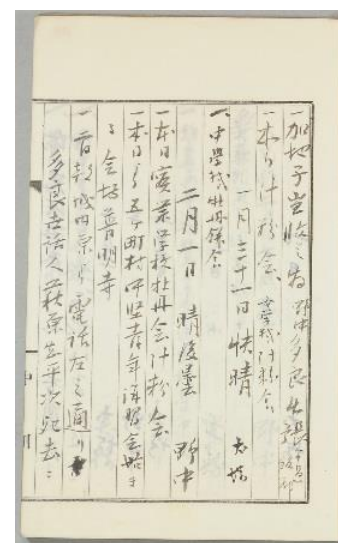
⑦ 鹿島鍋島家の宿直日記

今回は、おしるこ会の記述があるところを出しています。当時は、旧制中学校がぼた餅会、高等女学校の方はおしるこ会というのを鍋島家で開いていました。そのおしるこ会とぼた餅会の記述の部分になります。旧制中学校、高等女学校の4年生を鍋島家に招いて、歓談の場を持つ取り組みをされていました。

この時は、たまたま田澤義鋪が鹿島に戻ってくるということで、田澤の帰郷に合わせて日程を調整して行われた時期になります。

おしるこ会の始まりが、高等女学校に関する本では、大正4年の7月に行われたと書いてありました。ただ、大正4年の7月というと、直彬さんが亡くなった翌月にあたるので、その記述は本当かなあと思っていたのですが、こちらの金銭台帳をずーと見ていくことによって、大正4年の1月に初めておしるこ会が行なわれたということ、今回初めて発見することができました。

このように、いろんな史料を突き合わせたり、これまで注目されてこなかった史料を丹念に読み解いていくことによって、新しい事実であったり、あるいはこれまで言われてきたこととの違いを見つけることができるかと思えます。



宿直日記（鹿島市民図書館蔵）

